

「海の幸」迫力十分のレリーフ

久留米、韓国の財団が青木繁旧居に



序幕された「海の幸」のレリーフと、寄贈した河正雄さん（左）、荒木康博・青木繁旧居保存会長＝久留米市荘島町

久留米市出身の洋画家、青木繁（1882～1991）の代表作「海の幸」の原寸大のブロンズレリーフが、同市荘島町の青木の旧居に設けられ、29日、除幕式があった。韓国の文化財団が寄贈したもので、旧居保存会のメンバーは「代表作がゆかりの地で永遠に生き続ける」と喜んだ。

「海の幸」は青木が1904年に手がけた作品で、国指定の重要文化財。千葉県
久留米市の小谷家住宅に逗留して描いた。原画は久留米市の石橋美術館に常設展示されていたが、10月に美術館の運営が石橋財団から市に移管されるのに伴い、東京に移される予定だ。

ブロンズレリーフは、在日韓国人2世の河正雄・秀林文化財団理事長（76）と埼玉県川口市の玉川雄二が、日韓の美術友好交流の架け橋として寄贈を申し出た。30代で「海の幸」に魅せられた河さん

んは日韓国交正常化50年の昨年、レリーフの制作を決意。5点を作り、絵の描かれた館山市の小谷家住宅や韓国の3美術館にも贈った。レリーフは、絵画部分が横1・8メートル、縦0・72メートル。裸の男衆がサメを担いで行進している原画の迫力が立体的に表現されている。横2・2メートル、縦1・6メートルの台座は保存会が用意した。

（市川雄輝）